

2021年10月24日 『人が独りているのはよくない』

高橋克樹牧師

創世記2章4節b〜9節、同15〜25節、マルコ福音書10章2〜12節

神が人（アダム）を創造し、生活に必要なものをすべて整えたように見えた段階で、創造主である神はその創造の業の手を休め、この被造物が自らの意図にかなっているかどうか、人間があるべき姿を備えているかどうかを熟考してみたのです。すると、神はご自分で人間を創造したにもかかわらず、何か欠けていることに気づいたのでした。それは自己認識をどのようにして持つことができるかという人間存在の根本問題に関わる事柄でした。つまり、自分を見いだすためには、自らの姿を映し出す他者という鏡が不可欠だということに気づいたのでした。

神は人間が自らを相対化する対等な存在を持たないで生きていくことを望まなかった。それが『人が独りているのは良くない。彼に合う（ネゲト）助ける者（エーゼル）を造ろう』（18節）という思いだったのです。これは孤独な存在として自己完結的に生きることが人間本来の姿ではないことを、ほかならぬ神ご自身が判断されたことを示しています。人は交わりの中で、他者との出会いの中で生きるときに、人間としてより「良く」生きることができるようになります。

ですから、神は『彼に合う（ネゲト）助ける者（エーゼル）を造』ろうとされた。『合う』（ネゲト）とは、「ふさわしい」「相対する」「ぴたりと相重なる」「真正面から向き合う」などの意味を持つ言葉です。たとえば、「瀬戸物の茶碗を落とすとき、二つにパリンときれいに割れたとします。割れた断面の形はそれぞれ異なるけれども、割れ目を合わせるとぴたりと元の茶碗の形に戻ります。そのようなときに、このネゲト（合う）という言葉を使います。また、『助ける者』（エーゼル）という翻訳語は日本語では助手や補助者を連想させるので、人に従属する劣った存在のようにとらえられがちですが、ヘブル語のエーゼルにそのような意味はありません。英語でいえば対等の存在を意味する *partner* が最も的確にエーゼルの意味を伝えているといえるでしょう。互いに相手の存在がなければ自らの生命を存続させられないような *partner* 同士が「助ける者」と訳されているエーゼルの意味なのです。

このように神は人（アダム）を創造されたあとに、その存在に向き合うパートナーを創造しようと考えられたのです。それは自己完結的に生きることのないように、人間は自分の存在を相対化し、互いに支え合う対等な立場の他者（ブーバーのいうところの我と汝の「汝」のような存在）の必要性を痛感されたのでした。そこで、神は動物たちを造って人のもとに連れてきます。しかし、人は動物たちに呼びかけて、動物に命名はしたけれども動物たちからの応答はなく、人間と動物たちは相互に応答する関係性は築けなかったのです。旧約聖書で「名を呼ぶ」というのは、「相手を自分に向き合う存在として認め、自らの内に受け入れる」ことです。人は動物と *response* する関係を築くことができず、それは同時に互いに責任性 (*responsibility*) のある関係性も構築することができなかったことを示しています。つまり、互に向き合い、名を呼び合い、互いに支え合って、相互に責任性を持つ関係がそこには欠けていたのです。それゆえ、人は『自分に合う助ける者は見つけることができなかった』（20節）という結論になったのです。

そこで神は人を深い眠りに陥らせ、その肋骨を一本取り出してふさわしい助ける者（エーゼル）を創造します。『深い眠り』（タルデマー）とは、人間の自意識が消滅し、神の意志だけがあらわにされた状態のことです。これはまた、人（原文では男性ではなく普通名詞としての「人間」のこと）が女性の創造には何ら関与することはなく、相談にもあずかることのない部外者であったことが示されています。人の創造も女性の創造も神にのみ依拠していることを示しています。結

局、相互に責任性を果たし合う対等な他者は神によって人の一部から創造されたのです。そして、その前に、まず、人は自らの存在が裂かれる必要があったのです。自らの存在が裂かれることが人間存在の自己相対化の始まりとなっていることは非常に興味深いことです。

神が肋骨から創造した女性を人のところに連れてくると、人は『ついに、これこそ、わたしの骨の骨、わたしの肉の肉。これをこそ女（イシャー）と呼ぼう。まさに、男（イシュ）から取られたものだから』と感極まって叫んでいます。「男（イシュ）から取られたものだから」（23節）と言っていることに注目したい。これは、人は自らの存在が裂かれることで、自分を相対化する相手としての女性が生まれ、そのことによって初めて人は男性性を獲得し、自分にふさわしい助ける者が与えられたことを歓喜の声をもって受け入れているのです。

「わたしの骨の骨、わたしの肉の肉」という表現は最も身近な存在を意味する歓喜の言葉であり、何物にもかえがたい存在が与えられた喜びを表現しています。それは同時に、新たに創造された女性の素材が1本の肋骨であるがゆえに、partnerとして神が創造した女性は「もう一人の自分」でもあることが明らかになった瞬間でもあるのです。つまり、神は肋骨からもう一人の自分を創造されたのです。

そして、25節によると、人と妻は互いに裸であったが、恥ずかしがりななかったのです。裸を恥としないということは、互いに相手の顔を避けずに正面から体を向きあわせて、ありのままに応答しあう関係になっていたということです。

創世記3章では、人間が裸であることを恥じて身を隠したことが描かれています。この木から決して食べてはならないと、神に命じられた禁断の実Ⅱ「善悪の知識の木」の実をとって食べた人間は自分たちが裸であることを知り、身を覆ったのでした。そして、主なる神が園の中を歩く音が聞こえてきたとき、男と女は主なる神の顔を避けて、園の木の中に隠れたのでした。彼らは裸であることを恥ずかしく思い、身を隠したのでした。この記事は裸を恥じない関係を築くためには、神の顔を避けずに、神を受け入れなければならないことを示しています。相手が恐ろしかったり、受け入れがたくなっているとき、私たちは相手の顔を見ることを避けてしまうことを連想してみると、このことがよく理解できると思います。

さて、人は「何のために」結婚するのでしょうか。現代において、その問いには対して多くの方が「幸福になるため」と答えます。それは誰もが暗黙の前提として結婚に対して持っているイメージです。けれども、結婚が「幸福になるための手段」であるならば、結婚した後の人生全体もまた幸福になるという目的を達成するために、二人の人生は互いの存在をその幸福になるための手段化にしていることとなります。けれども、結婚生活は二人の配偶者同士が生涯にわたる『対話的出会い』や、自己を映し出す相手を得ることで深まる『自己洞察』、相手をありのままの存在として受けとめる『受容力』をもたらすためのものです。つまり、結婚は「幸福」という価値基準を越えた広い意味での「救済」を人に与えるものなのです。

ユング派の心理学者A・グッゲンビュール・クレイグという人は「結婚は幸福を得るための「手段」ではなく、人が「救い」を得て、本来のその人自身に到達するための一つの道程である」と言いました。それは神が人と、その人のもう一人のパートナーのそれぞれの魂の鍛錬を通して、二人を成熟へと導くために、神が結婚というかたちを与えるために互いをパートナーとして引き合わせたのです。そこには、幸福ではなく、まず、神による救いの業が現わされていることを当事者は認めなければならないのです。究極的な救済の道を開くために、神は独りであるのは良くないと判断されたのです。この考え方がキリスト教の隣人愛に結びついていくのです。隣人は自

分を映し出す鏡となるからこそ、その隣人を自ら遮断してはならないのです。

「君たちはどう生きるか」という岩波文庫のベストセラーがあります。主人公のコペル君は同級生の北見君が上級生から生意気だとにらまれて制裁を受ける危険性に立ち向かおうとします。しかし、仲間と皆で、上級生に立ち向かおうとしたとき、自分だけ足がすくんで立ち向かえなかったことで、自分の情けなさに寝込んでしまう場面が出てきます。

しばしば、隣人愛の話の際に、教会員の方から、「自分は隣人愛を実践できない」という話を伺います。聖書が言うところの隣人愛は、互いが対等の人格的な関係を築くということが前提になっっています。ところが、現実には、そういう人格的な人間関係を築くことができない人物がいるのです。人格的な人間の関係性を築くためには、どんなに立場に違いがあっても、相手の存在を尊重するという基本的な姿勢がなければ築くことはできません。そうではなく、相手に対して自分のイメージを押し付けて「あなたは○○な人」とか「友だちじゃないか。○○してよ」「君は○○と言ったじゃないか」という発言や要求をしてくる人は、友だちではなくて、あなたを利用しようとしているだけかもしれませんね。「君たちはどう生きるか」という本を読んで考えさせられたことは、「誰とでも仲良くしようとははいけない」ということでした。キリスト教信仰では、「神が出会わせてくれた隣人を愛しなさい」という不文律のような教えがあります。

でも、実際の人間関係では、とても仲良くできない人が自分の周囲には必ずいるものです。それはなぜか？ なかなか仲良くできない人は、総じて対人関係で自分の都合のいいことを他人に押し付けてくるからです。それらの人は、決して相手の存在を尊重しようとか、相手のことを大切に考えていない人です。いわば、人間関係を破壊しても構わないと考えて行動している人です。このような人に共通しているのは、自分よりも弱い立場にある人や、自分より立場的に弱いと考えている人を躊躇なく攻撃するのです。ですから、攻撃された人は仲良くできないと感じてしまうのです。仲良くしようとしても、相手は攻撃的で、人間関係を破壊的に考えている人だから無理なのです。コペル君たちの上級生が態度や挨拶が生意気だと言って、下級生をいじめようとする場面がありますが、こういう上級生は人間関係を破壊的に捉えている人たちです。破壊的に人間関係を考えている人と隣人愛の関係を築くことは至難の業です。そういう人と尊敬しあう人格的な関係を築くためには、そのような破壊的な人間関係を是とする考え方の根本を変えさせなければなりません。ですから、それを達成するための覚悟が必要です。

神が独りでいるのは良くないと考えられたのは、互いに尊敬しあう対等な関係を築くことで、人間として成長していくためであります。そのことを見失うならば、私たちは人間関係を破壊的に捉えて生きてしまうことになる危険性があります。人間関係を破壊的にとらえている人と渡り合うことで、自分もいつの間にか破壊的な考えに染まってしまわないように気をつけたいものです。